〔講演記録〕

第13回赤十字国際人道教育フォーラム
「秋田の人道の先達たち」

日時：令和４年４月28日（木）
場所：日本赤十字秋田看護大学・日本赤十字秋田短期大学

宮下正弘

The 13th Education Forum for the Red Cross and International Humanitarian: "Humanitarian pioneers of Akita"

Masahiro MIYASHITA

秋田赤十字病院名誉院長
介護老人保健施設山盛苑施設長
Honorary Director, Japanese Red Cross Akita Hospital
Facility Director, Sansei-en, Geriatric health services facility

司会：こんにちは。これから本学恒例の、第13回になりますけども、赤十字国際人道教育フォーラムを開催させていただきます。このフォーラムは例年ですと、国際活動で奔走されているいろいろな先生方ですとか、昨年は広島の平和記念館、原爆資料館の館長さん。コロナ禍によりオンラインでのビデオ出演で、二次元で登場していただいたりという、いろいろな方々、国内外で活躍されている方々をお呼びして､その方々の体験を聞いて､私たちの知の糧にしたいというようなプログラムです。

今年は地元、秋田に目を向けてみるということで、秋田の人道で先達に学ぶということで、秋田の人道の先達たちということを題にお話をいただきたいと思います。本日お招きした先生は、宮下正弘先生です。つい最近までお隣の赤十字病院の院長さんでおられましたので、ご存じの方も多いかと思います。

それでは講演に先立ちまして、宮下先生のプロフィールをご紹介させていただきます。先生は昭和17年１月､長野県の東御市のご出身であります。東御市って分かりますかね、東に御所の御と書いてトウミと読みますが。小諸市と上田市のちょうど真ん中に挟まった市です。県立上田高校から新潟大学医学部に進まれ、卒業後は、大学附属病院、それから鶴岡市の鶴岡市立荘内病院、新潟大学医学部講師などを経て、昭和57年４月に秋田赤十字病院内科部長に就任されました。その後、同病院副院長を経て、平成８年４月に秋田赤十字病院の第９代院長に就任され、平成24年３月にご退職されるまで、16年間の長きにわたり院長として活躍されました。この間、国内外の国際救援活動等々に病院職員を率先して派遣し、特に平成23年３月の東日本大震災では、直ちに救護班を現地に派遣するなど、救護活動の陣頭指揮に当たられておられました。病院ご退職後は、本学介護福祉学科の特任教授に就任され、その後非常勤講師として昨年９月まで本学で教鞭を執られました。また、これまで数々の役職もされておられまして、日本赤十字病院長ならびに日本赤十字病院長連盟会長、日本人間ドック学会副理事長、秋田県病院協会副会長、秋田ロータリークラブの会長などの要職を務められ、現在は介護老人保健施設山盛苑施設長としてご活躍です。

また、ご趣味も多彩で、プロ並みの絵画を描くことで知られておりまして、皆さんもお隣の病院行くとき渡り廊下がありますね。あそこの両サイドに水彩画が描かれていますよね。あれは全部先生がお描きになっておられます。今回使わせていただいた先生ご紹介のポスター（図１）も、先生が描かれた絵なんかを配置しています。交友関係

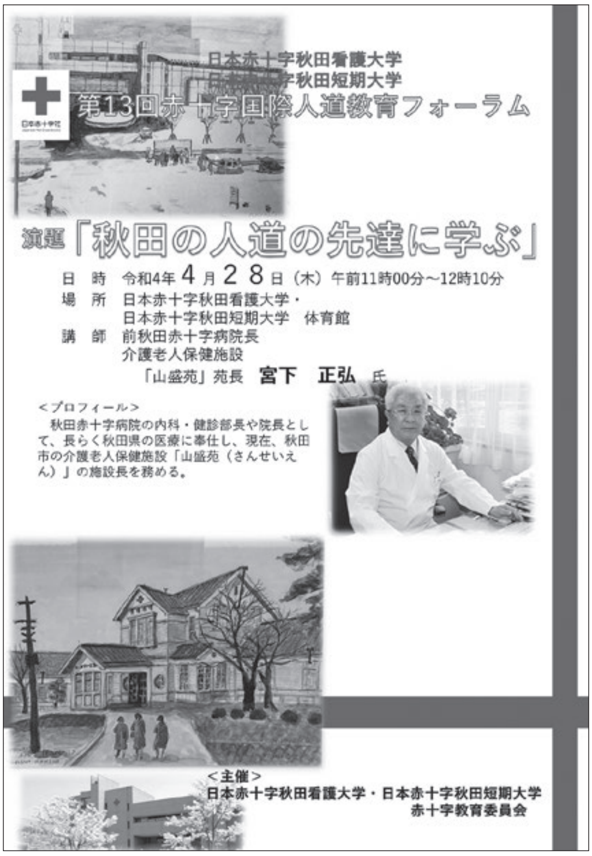


図１

にご趣味も各界との幅広い多彩な人的交流をお持ちの方で、これまで秋田市の文化団体連盟会長、秋田県芸術文化協会理事なんかも務められ、秋田市文化賞、秋田県文化功労者表彰、瑞宝小綬章などの多数の賞も受賞されておられます。

それでは、宮下先生にご登場いただきます。先生、それではご講演のほう、よろしくお願いいたします。それでは拍手をお願いします。

宮下：皆さん、こんにちは。盛大な拍手をありがとうございます。ご紹介のように、昭和57年、40歳の時に秋田に来まして、それから平成８年から赤十字病院の病院長に就任、平成10年に隣の病院がスタートしました。そして平成24年の３月まで16年間病院長をして、その後この大学の介護福祉学科に３年間お世話になりました。皆さんは今18、19歳ですかね、きっと赤十字病院で産まれた

人もいるのだろうと思います。病院はみんながアイディアを出し夢を盛り込んで完成しました。そして東日本大震災をはじめとするいろんな救護活動も含めて、たくさんの職員が頑張ってくれたんです。今司会から、いろんな表彰を受けたとの紹介がありましたけど、それはみんな職員が頑張ったことで世間が評価し、それに対して私が代表してもらったということだろうと思っています。

それでは早速今日のお話に入ります。２月24日の、ロシアのウクライナ侵攻以来、今まさに人道が問われている。毎日テレビに出る映像なんかは、目を背けるような状況があります。そういう国際的な人道問題のことは皆さんが授業で習っていると思いますけど、今日は地元に目を向けようということで、秋田の人道の先達たちということでお話をしたいと思います。秋田で今までどういう人が人道、特に海外の救護活動、その時にどういう人たちが活躍していたか。そういう人たちの熱い思いを皆さんに伝えて、みんながこれからこの大学でいろいろ学び、そしてその後の人生を考えていく上で参考にしてほしいなと思って準備しました。

これ（スライド１）は私が描いた絵ですけど、初代の赤十字病院です。赤十字病院が大正３年に

スライド１

秋田市にできました。辰野金吾設計の立派な病院ですね。それから２代目の病院、３代目は今のなかいちの所にありました。そして４番目が今隣に建っている第４代目の病院です。それからここに院長室があって、私は朝部屋に入ると大学のほうの救護員像に「おはようございます」って挨拶して机に座ったわけです。これが現在の看護大学、それから短期大学です。この４つの病院・学校から世界に飛び出していったということで、この絵を少し並べてみました。

今日伝えたい「人道の先達」たち

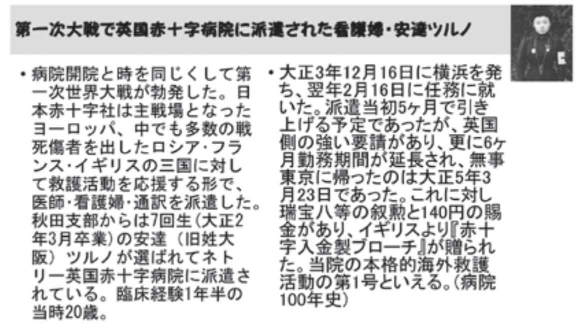
今日はこちらの４人の人とその人たちと少し関わってまた関係した人を取り上げてみたいと思います（スライド２）。まず、第一次世界大戦で英

スライド２

国に派遣された安達ツルノさん。今日は、立派な先輩ですけども、歴史を語る上では敬称略でいきますので安達ツルノ。それから後輩のために献体を申し出た佐藤直（ナオ）。そして、日本のマザーテレサともいわれ、数次の海外救護に当たった、そして志半ばで亡くなった中村きよえ、最後に高校３年の時、体育系の大学に進路が決まっていたのが、中村きよえの業績を記した本を見て、急遽「私の道はここにある！」と、海外救護を目指した成田真紀。成田はここの大学ができた1996年、日赤短大の１期生です。以上この４人についてお話ししたいと思います。

第一次大戦で英国赤十字病院に派遣された看護婦・安達ツルノ

まず第一次世界大戦（スライド３）。第一次世界大戦っていうのは、世界中を巻き込んだ最初の大戦。これは大正３年、1914年７月28日に勃発したわけです。ちょうど初代の病院ができたのが大正３年の７月１日です。そのときに日本は連合国



スライド３

側に入っていましたので、連合国側から救護を日本は出してほしいと要請があり、日本はそれに応ずる形でヨーロッパに救護班の派遣を決定したわけです。国から日赤に、日赤本社から秋田の病院に１名の派遣要請がありました。そこで秋田からは７回生、というのは大正２年３月、７回生までが病院ができる前の養成所の卒業生ですけども、この７回生の安達さんが選ばれて、英国のネトリー病院に派遣されたんです。まだ臨床経験１年半で、たった20歳。それがイギリスに派遣されたという。それは本当にびっくりしました。こんな若く、それこそ臨床経験も多くなくて、よくぞ決断したものと思います。ネトリー病院には、いろいろな人がいて、その中の日本人の一人ですけれども。そういう安達さんっていう人がおりました。当初５カ月の予定で行ったんですけど、非常に評判も良い、何とか残ってほしいといって、さらに６カ月を延長して、無事に翌年、翌々年かな、大正３年12月に出て行って、大正５年の３月に帰ってきました。そういうことで、国から勲章をもらい、イギリス赤十字名入りの金製ブローチなども贈られました。

これが秋田赤十字病院の海外救護活動の第一号であります。その前に日露戦争がありますけど、それで病院船に乗って活動はしてますけれども。本格的に海外の土を踏んでそこで医療活動をやったっていうのは、安達さんが最初なわけです。写真ではまだあどけない感じですね。皆さんと同じ年代です。これ（スライド４）がイギリス派遣隊の全員で、その中の安達さん、一番若かった。あとは少し年配のベテランの人たちが行ったわけで、若いからみんなにかわいがられたと言っています。

スライド４

英国のネトリー病院っていうのは1863年にできた軍の病院ですけども、赤十字が管理してたということで（スライド５）。これもなかなか立派な病院で、まだ診療所だった時代から軍医の養成施設で、シャーロックホームズにワトソン君っていう医者が出てきますけども、それはここの軍医養成所で医者になったということです。医学の研究も盛んで、腸チフスのワクチンが最初に開発された病院だという業績もあります。

英国ネトリー赤十字病院とは

ネトリー軍病院は1863年開設である。ナイチンゲールはこの病院の設計図を見て、換気も照明も不十分である上に、長い廊下をはさんで両側にベッドが並ぶ構造上の問題を直ちに指摘し、変更をせまったが、時すでに遅かったという経緯がある。それでも、病院だけではなく、軍医養成（シャー ロック・ホームズの相棒ワトソンはここを卒業したことになっている）、看護婦養成、医学の研究（腸チフスのワクチンが最初に開発された）の施設として 1世紀以上にわたって存続した。

ネトリー軍病院は、第一次世界大戦（１９１４年－１９１８年）や第二次世界大戦（１９３９年－１９４５年）で活躍したが、その後、維持費用の関係で、次第に使用されなくなり、１９５８年に閉鎖され、１９６６年には取り壊されてしまった。

スライド５

これがナイチンゲールのお墓の前です（スライド６）。そこで、これが安達さん。そして病院で看護をする安達さん。それからこれはネトリー病院です。この時代に、おそらく命令という形ではあったんでしょうけども、イギリスまではるばる、英語力もそんなになかったんだろうと思いますけども、そこに飛び込んでいったというその勇気には、本当に感心したわけです。ですからぜひ、こんな人がいたことを知ってほしく、ここに取り上げました。

スライド６

次は２番目の佐藤直（ナオ）です（スライド７）。

これは皆さん、ホールから上を見上げるとここに一対の絵があるのが分かると思いますが、気が付いているかな。この絵は光明皇后とナイチンゲールの絵なんです。この奥の方には、ナイチンゲール章という、看護師の最高の栄誉であるナイチンゲール章の３名、秋田の看護養成学校を卒業

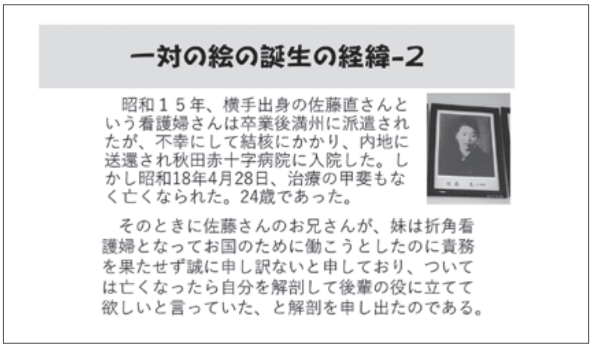
した３名が受けていますけども、その写真があります。そして「人道」、今日のテーマですね、「人道」と書いた立派な書がここにあります。この絵と佐藤直のことについてお話ししましょう（スライド８）。このナイチンゲールの絵、これは、大正３年に病院が出来たとさっき言いましたけども、そこに一緒に救護看護婦養成所が併設されたわけです。その以前の秋田の赤十字の養成所は７回生まで、さっきお話した安達さんが７回生ですけど、病院ができてこの養成所の最初の卒業生８回生っていうことになるんですけれども。その８回生と９回生の人達が、小遣いを出し合って後輩たちに、看護の心を伝えようとナイチンゲールの絵の寄付を考えて、市内の画家に頼んだのです。それが大正７年頃です。裏には「卒業して行く者が後輩のために残す」と書いていてあるそうです。ナイチンゲール像がまずあったということです。こうしてナイチンゲール像（日本画）が代々病院に伝えられてきました。

スライド７

スライド８

「一対の絵」と佐藤　直

（スライド９）そして時代が変わって昭和15年、横手出身の佐藤直さんという看護婦さんが満州に派遣されたけども結核に罹り、内地に送り返されて赤十字病院に入院しました。そして治療の甲斐



スライド９

スライド10

なく昭和18年４月28日に亡くなられました。24歳です。この大学の３階に戦時中の殉職された皆さんの写真がありますけど、その中の１枚が直さんです。そのときにお兄さんが「妹は折角看護婦となってお国のために働こうというのに責務を果たせなくて申し訳ない」と。そして妹は「亡くなったら自分を解剖して後輩の役に立てて欲しい」と言ったといって、解剖を申し出たというのです。当時の神崎院長は感動して、翌４月29日、今は昭和の日ですけども、戦前は天長節と言いましたが、そこに参列したままのフロックコートの上に白衣をまとってみんなが粛として見守る中で病理解剖したというのです（スライド10）。神崎先生は、24歳の乙女が、亡くなったとはいえ自分の裸体をみんなの前でさらして解剖を受ける、その心に非常に深い感動を受けたということが書いてあります。忌が明けた後、またお兄さんが来訪されて、香典返しと妹のささやかな貯金を合わせて、何か役に立ててほしいっていうことでお金を置いていかれました。

神崎先生は、ナイチンゲールの対の絵を置くなら光明皇后だと考えたのです（スライド11）。ナイチンゲールが西洋の看護婦のシンボルなら、日本のシンボルはあのライ患者の膿を自ら吸いたもうた光明皇后ではないか。光明皇后というのは、

大仏を作った聖武天皇の奥さんなんですね。藤原家の出身で非常に有能な皇后陛下だった方です。そこでその光明皇后の絵を秋田在住の日本画家高橋萬年画伯に頼もうということでお願いした。そこで萬年さんは、光明皇后の絵を描くことは引き受けますが、その対になる絵を見せてほしいといって、ナイチンゲールの絵を病院に見に来たんです（スライド12）。そしたら何とびっくり、このナイチンゲールの絵は自分が､大正７年前後の、若いときに描いた絵だったということなんです。これも大きな偶然ですね。それが昭和18年のことです。そうして光明皇后とナイチンゲールの対の絵が誕生して、大学に飾ってあるわけです。なので、ホールから上を見上げると､「ああ、この絵はこういういきさつがあるんだな」ということを、皆さんちょっと、ただ絵があるというんじゃなくて、その背景を考えてほしいと思います。

スライド11

スライド12

（スライド13）これは余談ですけど、萬年の奥さんが日赤の看護婦長さんで病弱な萬年を非常によく支えて、絵を、画商的に生活も支えたということが書いてあります（スライド14）。それから私が日赤の本社に行ったときに､本社の人から｢秋田の看護婦さんが、靖国神社のカレンダーに載ってますよ」って持ってきてくれたのがこれですけども、ここに佐藤直さんが載っているんです。佐藤直命と書いていますけども､これは佐藤直命(みこと)。靖国神社に祭られると、それは神様になる。大国主命みたいな、あの命（みこと）になるんですね。

スライド13

スライド14

これ（スライド15）は本学の３階に、戦時救護で殉職した方々の遺影が飾ってあります。上の方の絵は靖国神社の大灯籠にあるレリーフですけど、私が靖国神社に行ったとき、これは赤十字の救護看護婦だと思って、そこでスケッチしたものです。救護現場の緊迫感が伝わってきますよね。

スライド15

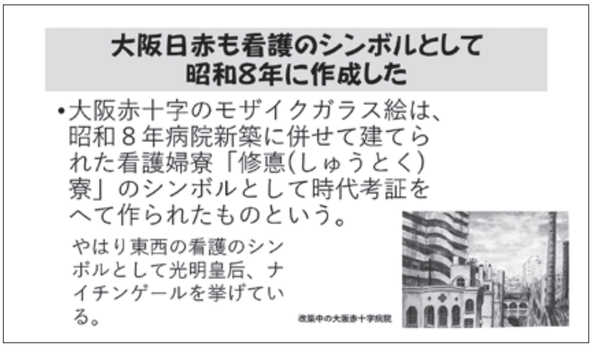
次に救護員像のことをお話します（スライド16)。救護員像ってどこにあるか分かりますか？

そう、右側の写真を見れば、すぐ分かりますね。この大学の正面ですね。赤十字の100年、創立100年のときにそれを記念してみんなで募金して、日赤秋田県支部が中心になって作ったのが、この救護員像です。前の赤十字病院と看護専門学校は、今の“なかいち”のところにあったわけですので、救護員像もその一角に設置されていました。1996年に短大がここにでき、病院も２年後に移るとなった時、この救護員像をどこに置くかが議論になりました。私は、赤十字病院から皆救護に行ったのですから、病院のほうに置いてほしいと思ったんですけども。当時の竹本院長や看護師同方会の皆さんも、やはり教えるところにその像があることが望ましいという意見で大学の前に設置が決まったのです。病院がその２年後に隣に移ってきたんですけども、病院のほうも見守ってくれているということで、「ああ、これはありがたいな、これでいいんだな」というふうに私は思いました。ですからその入り口を、みんなは何となくただあるものとして学校に通ってきているかもしれませんが、戦時救護で亡くなった人、そういう人たちの苦労も偲んで、そしてそういう先輩たちの心意気を伝えたいということで、ここにあるっていうことを知ってほしいと思います。

スライド16

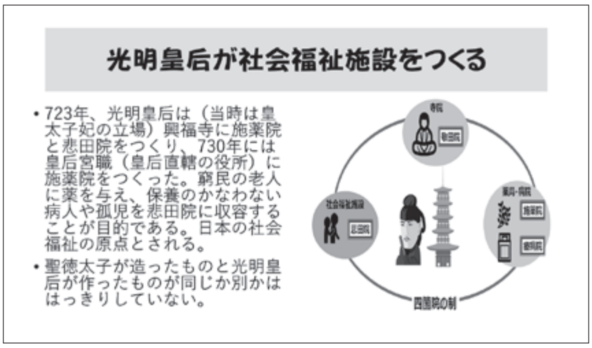
この一対の絵（スライド17）、これが驚いたことに大阪赤十字病院にもあるんです。それはまたちょっと絵が違って、ガラスモザイク画というものですけども、ナイチンゲールと光明皇后がやはり東西のシンボルとして飾られていました。制作されたのは昭和８年ですから、秋田の絵が一対になった昭和18年より10年早いんですね（スライド18）。大阪赤十字病院の看護婦寮「修悳（しゅうとく）寮」にシンボルとして、飾られたということです。当時の神崎院長がこの大阪の絵を見て対にする発想をしたのかなともちょっと考えましたけど、どうも接点がない。それぞれが東西のシンボルということで発想したものと思います。

スライド17



スライド18

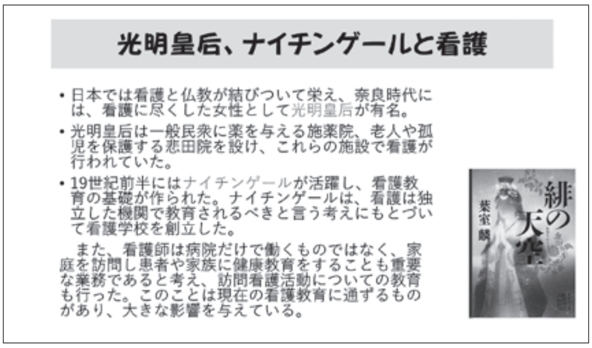
光明皇后は社会福祉の面でも、日本で最初に制度を考えた人であると言われています（スライド19）。聖徳太子が施薬院とか、そういうものを作ったという記録がありますけれども。それと同じのかどうかがちょっと分からないんですけども、光明皇后が国の施設として、悲田院とか施薬院とかのそういう社会福祉施設を作ったということで、社会福祉施設の、何というかな、パイオニアですね。そういうこともいわれています。



スライド19

ナイチンゲール（スライド20）、皆さんこれからいろんなとこで勉強するんですけども、看護教

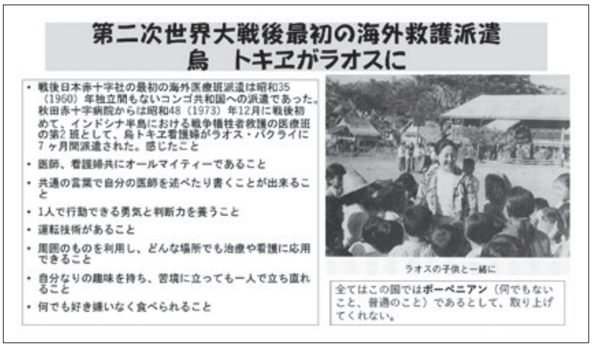
育の基礎を作った方ですね。今ウクライナ戦争で時々出てくるクリミア半島、2014年のロシアが併合しましたが、あそこを巡って1853年に勃発したクリミア戦争では、ナイチンゲールが軍隊から要請されてここに看護師を率いて戦場に赴いたという歴史があります。そこでナイチンゲールがえらいのは、単に看護をしたっていうだけではなくて、病気なり死因なりそれをしっかりと調べて、そして公衆衛生学的な見地から、戦争で弾で死ぬよりも感染や栄養障害とか、そういうことで死ぬ人が多かった。そういう死亡の統計をしっかり取って、後々にいろんな活動にそれを生かしていったことです。更に看護師が病院だけではなくて、健康教育とか訪問看護活動とか、現代につながる活動を進めていたことも、看護の母といわれる所以でもあります。なお看護婦を「白衣の天使」と呼ぶのは、ナイチンゲールに由来するといわれますが、ナイチンゲール自身はそういったイメージで見られることを喜ばず、本人の言葉としては、「天使とは、美しい花をまき散らす者でなく、苦悩する者のために戦う者である」が知られています。



スライド20

海外救護の志し半ばで逝った中村きよえ

次に、戦後に入ります（スライド21）。第二次世界大戦、日本にとっては太平洋戦争が1945年に終了しました。赤十字は「軍の赤十字」から「愛の赤十字」に大転換を遂げました。戦後の日本赤十字社の海外救護派遣は、昭和35年、1960年にコンゴ共和国への派遣が最初でした。秋田においては、国際赤十字委員会の要請を受けて、1973年12月に秋田赤十字病院では戦後初めてインドシナ半島に派遣したのが最初です。烏トキヱ看護婦がラオスのバクライっていうとこに戦争犠牲者救護ということで、７カ月間派遣されています。この烏さんは後に赤十字病院の看護部長を務め、退職してからは、本社の看護師の研修所、研修所っていうのは看護管理者になるための、１年間研修が必要なんですけど、その研修所の責任者にもなり、そして秋田県看護協会の会長も歴任した方です。思うのですが、本社から誰か海外救護に行かないかという要請が来るときに、院長とか管理者は誰か行ってくれないかなと思うわけですよね。そんな時「はい、じゃあ私が行きます」と手を挙げてくれるっていうのは本当にうれしい。助かりますね。もちろんそれにふさわしい人を選ぶわけですけども、大抵そういう積極的な人っていうのはほんとに安心して派遣できるというふうに思います。

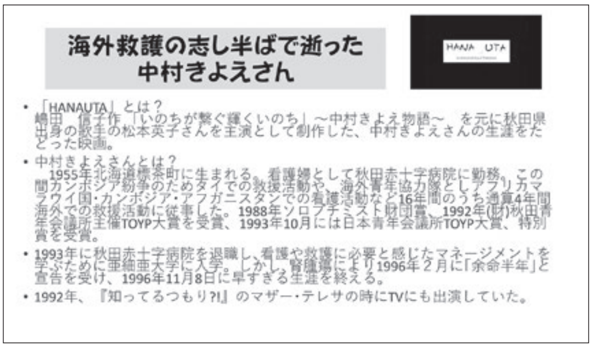


スライド21

そして烏さんが体験記の中の最後に書いていることとして、派遣されて感じたことがあります。これはやっぱりこれからの皆さんのいろんな活躍、活動する指針にもなると思うので、お示しします。医師、看護婦共にオールマイティーであること。オールマイティーっていうのはなかなか難しいことだけども、ただ自分は例えば内科、医者でいえば内科とかあるいは外科とか整形外科、そういう専門だけじゃなくて、ある程度なんでもやれる、そういう対応できる能力がないと、こういう外国の医療現場にはなかなか行けない、使えない、役に立たないってことです。あと、医師や看護婦のプロの仕事の広いベースを持って、変に専門に凝り固まってしまうといけないっていうことです。それから共通の言葉で自分の意思をきちんと述べ書くことが出来ること。言葉も非常に大事、今赤十字で海外救護に行くには、英語のレベルが高いところを深いところを求められます。やっぱり、現地で世界からの仲間と一緒に赤十字は働きますから、英語の能力をいろんな機会に使って、自分で鍛えてもらいたいっていう話です。せっかくの気持ちがあっても、語学能力が壁になってし

まうことがあります。次は１人で行動できる勇気や判断力を養うこと。その場その場で上からの指示がない所で判断が求められます。そういう所に行くと、突然そばに大砲の弾が飛んでくるとか地雷が破裂したとか､いろんなことが起こるんです。また運転技術が必要であると。周囲のものを利用して、どんな場所でも治療や看護に応用できること、あるものを使って、これを使えば何とかなるんじゃないかって。そういう頭を使って考えて、ああしようこうしよう、そういうことが必要になります。それから自分なりの趣味を持ち、苦境に立っても一人で立ち直れること。日々連続のストレス生活ですから、そういう中で歌だとか趣味をたしなむ。それから何でも好き嫌いなく食べられること、ということも書いていました。

それで、今日のメインの中村きよえさんのことをお話しします（スライド22）。最近「HANAUTA」っていう、これは30分映画なんですけども、中村さんの生涯をまとめた映画で。多分ここの大学にもあるし、皆さんの上の学年の人たちは見たと思います。



スライド22

中村さんっていうのはどういう人かっていうと、北海道に生まれたと。そして秋田の赤十字病院に勤務。秋田赤十字の看護養成専門学校に入ったんです。彼女は女性としても自立したい、その壁になっていたお父さんへのいろいろ反発があったので、得意な英語を生かせる、世界とつながるようなところを探し、海外救護の実績がある秋田赤十字病院の看護専門学校を選んだのです。海外救護を目指したってゆうのは、その当時ははっきりしてはいなかったようですが、赤十字の国際性っていうとこに惹かれたということですね。

そして赤十字病院で勤務してから彼女は動き始めます。まずカンボジア紛争で発生した大量の難民を収容しているカオイダン難民キャンプに２回行ってます。

それから青年海外協力隊として、アフリカのマラウイ、それからカンボジア、アフガニスタン、それで今ウクライナに侵入中のロシアが、当時はソ連ですが、アフガニスタンに侵入して、大量の難民がパキスタンのほうに逃れてきた。その難民キャンプにもいっています。看護師となって16年のうち通算４年海外での救護活動に従事して、こういういろんな表彰を受けています。

そして彼女は1993年に病院を退職して亜細亜大学に入学したんです。看護の他救護に、このままではなくてもうワンステップ自分は上を目指したい。こういうふうに必要な場合のものにはマネージングと。それから経済、そういうことも必ず看護に必要だし、そういう体系を勉強したいということで入学したのですが、その３年後、腎腫瘍が見つかって２月に余命半年と言われたんですけど、11月８日に早すぎる生涯を閉じたのでした。「知ってるつもり?!」っていう番組でマザー･テレサを取り上げげたときに、日本のマザー・テレサとしてテレビにも出演しています。

中村さんは昭和30年10月に北海道標茶町に生まれています（スライド23）。地図のここです。そ

スライド23

して高校卒業して秋田赤十字看護専門学校で学びました。右側が看護学校のときの中村さんの写真です。中村さんの歩みを表にしたのがこのスライドです（スライド24）。これが最初のカンボジア難民救護派遣、それから青年海外協力隊でアフリカ、マラウイの共和国。２回目のカンボジア難民の救護に。幹部看護師となるために、日赤本社研修を１年間。この後先ほどのアフガニスタンにも６カ月います。その後スイスのジュネーブでICRC赤十字国際委員会の国際救護研修に参加。あと湾岸戦争です。この湾岸戦争のときにもジュネーブに行って、それからシリアとバーレーンで

大量の難民が来るとの予想で待機していましたが、実際には来なかったため、直接の難民救護活動はここでしなかったのですが、待機しているうちに各国の人たちといろんなことを勉強し、さらに自分はバージョンアップが必要と考え、先程述べたように退職したんです。

スライド24

中村さんのすごいなと思うのは、こういうカンボジアの救護とか海外協力隊とか、そういうところへ行って、そこでさまざまな人と知り合って、そういう人は中村さんに惹かれたんです、彼女の真摯（しんし）さ、謙虚さ。そこで人と人とのつながりがどんどんどんどん広がっていたというのも、彼女の略歴を見るとよく分かります。

秋田赤十字病院のカンボジア難民救護事業を担ったのは、当時副院長の五十嵐先生っていう産婦人科の先生です（スライド25）。中村きよえさ

スライド25

んと、それから一緒に行った村上照子さん。それから熊本日赤の看護婦さん。中村さんは、日本にいては考えられないような生活の中で３カ月を過ごし、帰ってきて自分はたくましくなったと感じられると述懐しています。こんな子供たちと関わったり、それからこれは病舎の写真。これは当時の竹本院長がメンバーの激励に訪れたときの写真もあります（スライド26）。

それから、ちょうどここに彼女がいるときに、秋田大学の４年生の学生が来たんです（スライド27）。日本が難民の救済に貢献していないというニュースに触れて、これは何とかしなきゃいけないということで、カオイダンに飛び込んでいったんですね。それが今，日赤にいる遠田先生ですが、当時日本へ帰ってきてからの魁（新聞）の写真です。何処にも熱い思いを持った人はいるものですね。

スライド26

スライド27

それで、この遠田先生はその後、外科の修練をした後WHO、世界保健機構に入りまして、特に東南アジア方面の疾病予防活動を主に活躍して、ついこの間定年になってWHOを退所して、今、秋田赤十字病院のワクチン接種センター（スライド28）に所属しています。今コロナのワクチン接種に関連して、講演依頼が殺到し、西に東にと頑張ってる非常にナイスガイです、いい男。明るく元気で前向きで、彼と一緒にいると何か元気にさせられるという男です。それも国際活動の中で培われたものと思います。そして学生のとき已むに已まれず飛び込んだカオイダンに秋田の看護師さんがいたってことで、WHO職の時も日本赤十字で何かもうちょっと自分が役に立ちたいっていうことで現在があるわけです。

スライド28

これ（スライド29）は中村さんの書いた日記で、「今日が忙しい。日中の入院が９人、地雷患者は４人。受傷時の創部を初めて見たが、すさまじい。足首から先と、腓骨が吹っ飛ばされ、もうひとりは体中に鉄片が刺さっている。瞳孔散大。もうこれは命はない。難民の人たちは難民としてずっといるわけじゃなくて、また別のところにより良い環境を求めて移ってゆく。人は減っていくが大砲の音は毎日響くし、軍用機は飛ぶ。戦車、兵隊が黒いトラックで国境に向かっている。日々移ろっていく」ということを書いてます。これ（スライド30）は多分今のパキスタン、アフガニスタンの戦争のときにパキスタンに行ったときです。帰ってきてその報告に書いてたんですが、パキスタンでは、なんだかんだというと「インシャーラ」で、終わってしまう。「ここはパキスタン、インシャーラ（全て神の御心のままに）である」と。彼女はそういう社会を実感してきたのです。これ（スライド31）は湾岸戦争。湾岸戦争といっても知らない人が多いかもしれませんが、この戦争に、日本の赤十字から派遣されたときの出発時の記者会見の写真です（左下）。

そんなに活躍していた、そして次への飛躍を求めて亜細亜大学で勉強している最中に、何ということでしょう、進行した腎臓がんが病気が見つかったのです。これ（スライド32）は死の３カ月前、上智大学のデーケン先生が「生と死を考えるセミナー」を主催したときに、彼女はそこに呼ばれて自分の体験を話しているところです。そのときは自分の余命はもうほとんどないということを知っていましたけども、声を振り絞って、皆さんに語られていたのです。「私は救護活動を通じて、人のたくましさを知っている。人はどんな状況の中でも生きてゆく」と。それは将に中村さん自身でもあると思います。何事にも前向きなわけです。死ももうこれは仕方がない、慫慂として受け容れて、最後に出来ることとして「献体」を選ぶという人生を貫いたわけです。それでさっき言った、16年の秋田赤十字病院の勤務中に、４年間は海外で過ごしたのです（スライド33）。病院では交通

スライド29

スライド31

スライド30

スライド32

災害センターっていう一番救護現場とも近い救急の最前線で働いていました。これは数少ない職場での写真です。最後は平成８年11月８日、東京都小金井市のヨハネ会桜町病院のホスピス病棟で永眠されています（スライド34）。中村さんの死を悼み、赤十字病院の広報紙「杉の子」に特集を組んで、彼女を追悼しました。見出しは「赤十字国際救護の星墜つ、中村きよえさん永眠」でした。

スライド33

スライド34

きよえさんのことを嶋田信子さんっていう方が、『いのちを繋ぐ 輝くいのち　中村きよえ物語』というタイトルの本を出版（スライド35）、それを基に映画化もされたんですね。それだけ充実した、人に熱い思いを抱かせる彼女の人生だったと思います。

スライド35

中村きよえに触発された成田真紀（短大１期生）の決断

そしてその中村きよえさんに触発されて、海外移住の道を開いたのが、成田真紀です（スライド36）。成田真紀についてはご存じの先生方もいると思いますけれども、日赤短大の１期生、1996年４月にここが開学したんですけども、そのときの１期生であります。彼女は秋田赤十字病院に勤務中に語学留学に行っていますが、その報告の中になぜ自分は日赤短大に進んだかについて書いています。「自分は高校時代陸上部の部活一筋でした。ところがある日珍しく部活が休みになったので、時間を持て余して普段行くこともない図書館を訪れました。そのとき何気なく手に取った雑誌を読み、読み終えた私は放心状態となったのです。その雑誌には秋田赤十字病院の看護師であり、世界各国で活躍された中村きよえさんについての記事が記されていました。私はその足で職員室へ行き、ほぼ確定していた体育大学の進学を急遽変更して、看護師になると担任に伝えました」、ということで、確か東京女子体育大学が決まっていたのを、やめたと。私の進む道はこの中村さんの道だっていうことで、その足で担任にいって。やっぱり何か触発されたのですね、私の生きる道はこれだ、と心に決め、短期大学の１期生に入ったというわけです。

スライド36

そして赤十字病院看護師になったんですけども、なかなかそういう当初描いた海外の救護っていうのはなかなかチャンスがなかったということでしたけども、そんな中で英語を磨いたり語学留学をしたりしながら着実にベースを作っていったのです。この（スライド37）写真ですね、何でこの写真をここに入れたかというと、看護専門学校の88回生の卒業式です。専門学校の最後の卒業生です。その２年前にこの短期大学が開校し、もう

後輩がいないわけですね。いつもは学生が歌だったり踊りだったりで卒業を祝福してくれたんですけども、それがないのは淋しいなと思っていたら、そこにこの短大の１年生２年生がみんな来てくれたんです。感激でしたね。成田さんはこのとき２年生でした。それからここに写っている神奈穂さんは、その後JICAの活動で２年間中国へ行ってきました。日本での医療技術の指導やシステムなんかを現地に教える部分もあったけど、学ぶ部分も沢山あったと書いていましたが、２年間活動してくれました。

スライド37

中村さんに触発されたこの成田さんは、2006年12月から６カ月間、HIV感染症/エイズの予防活動にアフリカのジンバブエに派遣されました（スライド38）。この病気はサハラ以南のアフリカでまん延していたために、病気の知識啓発と予防支援医療が喫緊の課題でした。彼女はそれらの任務をこなすほかに、いろんな疾病予防や健康増進活動に６カ月携わり、たくましくなって帰国しました。この間月に一回、「MAKI from Zimbabwe」というリポートを病院の広報紙「杉の子」に寄せてくれました。右下が帰ってきたときの写真です。

成田さんはその後、アメリカで向こうの看護師資格を取り、そして向こうで結婚して子どもさんもいるって話を聞きました。彼女も自分で自分の道を切り開いて、これが私の生きる道として、現在アメリカで暮らしてるわけです。そういう人生も素晴らしいですね。

スライド38

このように（スライド39）、中村さんも成田さんも自分の道を進んだんですけど、また、人生も楽しんだのもいろんなところで垣間見えます。中村さんはサクソフォンを演奏し、病院のバンドの一員でもありました。また、こうしたお茶をやったり、それからこれはカオイダンのところで日本の浴衣を着て現地の人達と交流をしたりしています。成田さんはサルサというダンスに熱中していましたが、こういうところを見ると、やっぱり人生を楽しむという余裕を、お二方を見ていると感じました。

スライド39

文化とは伝えること、伝わること

最後に「文化」と言うことについて考えてみたいと思います（スライド40）。赤十字の人道という文化、救護活動という文化、困ってる人が、苦しんでいる人がそこにいるとき、何とかしなきゃいけない。そういう文化が赤十字を形成しているのですね。その文化についてちょっと触れてみたいと思います。「それはイモからはじまった」っ

スライド40

て何だとお思いでしょう。何でイモが文化なんだと？？それはこんな話なのです。九州の幸島、サチジマっていうのかな。そこの島に猿の集団が生息しているのです。そこの学校の先生がこういう現象を見つけたのです（スライド41）。どんなことかと言いますと、ある一匹の子猿がイモの砂を海岸で洗って食べている、そういう現象を見つけた。今までそういうことを見たことなかったのですが、すると一緒に遊んだ子猿たちも、それをまねして、イモを洗って砂を取って食べるようになってきた。きっと砂も取れて、塩気もついておいしかったんでしょうね、そうするうちにその親たちも真似したり、それからその最初にやった猿の子たちが親になると、その子の、その子たちがそのイモを洗う。イモを洗うことを覚え、伝わっていったのです。京大霊長類研究所の松沢先生、今京大の総長ですけれど、は文化の原点がここに見られる、と大きな意味付けをしているのです。「伝わることが文化である」と。

スライド41

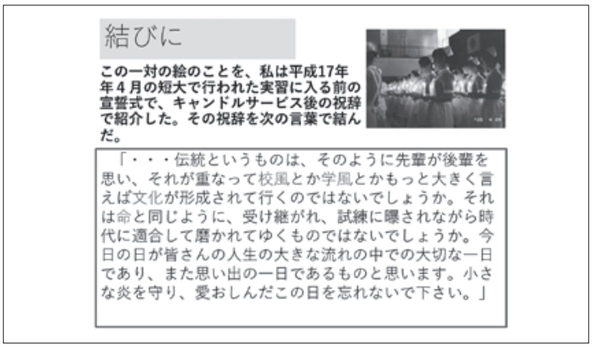
１人がいいことをやる、創造的なことをしたとしても、それはまだ文化としては成立しない。でも周囲のたくさんの人にそれが伝わり、世代を超えて伝わっていけば、これが文化として成立するのではないかと言っているわけです。こういう（スライド42）一対の絵のように熱い思いで後輩たちに絵を残すというのも、これもやっぱり赤十字の文化、伝えることが伝わることが文化っていうことではないか。感動することが文化を生み、伝えることが文化になるんじゃないかというふうに考えております。

神崎先生が言ったのは、先輩が後輩を思う愛、これが赤十字看護婦の生まれる原動力ではないか。先輩後輩の結ぶ愛の絆がどんな世情世相になっても、どうか切れないようにあってほしいということを先生は願っていたのだと思います（スライド43）。時代は変わっても、やはり同じこの校舎の中でもあるのではないでしょうか。同じ赤十字の旗のもとに、看護師を、介護士を目指して学ぶ、様々な活動を一緒にやる中で、先輩の思い、後輩の考えというものが一緒になって、この大学の文化っていうのが作られていくんじゃないかなということを私は感じました。

スライド42

スライド43

今日、先ほどまでキャンドルサービスが行われたようですけれども（スライド44）、十何年前の宣誓式に私が学生さんに語ったものです。「先輩が後輩を思い、それが重なって校風とか学風とか、もっと大きく言えば独自の伝統・文化が形成されてゆくのでないでしょうか。生命と同じように、



スライド44

受け継がれ、試練に曝されながら時代に適合して磨かれてゆくものではないでしょうか。今日の日が皆さんの人生の大きな流れの中での大切な一日であり、また思い出の一日であるものと思います。小さな炎を守り、愛おしんだこの日をどうか忘れないで下さい。」

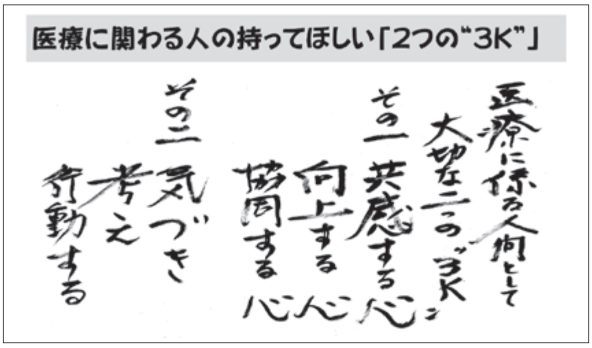
中村きよえさんと一緒にカオイダンで働いた村上照子さんは後にこの大学の教授となり、介護学科長をされましたが、こんなことを書いていました（スライド45）。「同方会の歴史を調べていて、時代や組織に翻弄されつつも、美しく生きた人々、良く生きた人生の底には、その人だけの非凡な歴史が残っている。最前列ではなく、後ろの列で人や組織を支える人がいる。その人のことを思うと、心にジーンと温もりを感じる」私が今日お話ししたのは、強い意志を以って最前線で海外救護で活躍した人達ですが、そういう人だけじゃなくて、それぞれが全力を尽くして、表に立たないけども後ろのほうで組織や人を支えた、そういう生き方も、それは大変評価すべきであることは言うまでもないことです。

スライド45

医療に関わる人の持ってほしい「２つの“３K”」

これ（スライド46）が最後のスライドです。皆さんに２つのことを伝えたい。医療に関わる人に持ってほしい「２つの“３K”」です。その一は、大変だなあ、可愛そうだなーと「共感する心」です。それから「向上する心」。皆さんが看護・介護のプロとして働いていくには、やっぱりプロとしての技術、知識、そういうものを常に向上させていく。それを欠いたら駄目ですね。国家資格を持った人と言えなくなってしまいます。それからみんなと「協同する心」。１人では活動できませんよね。チーム医療の時代です。みんなと力を合わせてやっていく、そういう心。この３つの心が大事だというのがその一です。

それからその二は、この学校のいわば校是ともいえる「気付き、考え、行動する」です。最近チコちゃんが言ってますね、「ボーっと生きてんじゃねーよ！」同じ現象を見ても、気付く人と気付かない人がいますね。でもやっぱり気付いて初めて心の炎に火がつくわけです。そして考えて行動する。行動することで初めて気付いたことが生かされるわけですし、変化が生まれます。いずれもK，K，Kですね。だからこの２つの３Kを今日の教訓として持ってほしいなというふうに思います。



スライド46

ということで、ここ（スライド47）に出てきた人たちに登場していただいて、今日は特に秋田の赤十字病院関係の人たちを取り上げて、皆さんにこういう先達がいたんだということをお話ししました。じゃあ私たちはどう生きるか、そういうことを考えるチャンスにしてほしいということであります。これから４年間、それから介護のほうは２年間しっかり勉強して、自分のなりたい道を探して進んでいってほしいなというふうに思います。

以上です。どうもご清聴ありがとうございました。

スライド47

司会：宮下先生、どうもありがとうございました。もう時間ちょうどなりましたけど、何か学生さん、１つぐらい質問があれば１つだけお受けしますが、何かありますか。どんなことでもいいです、感想でも結構です。どなたかいらっしゃいますか。ないようですね。じゃあ先生、どうもありがとうございました。

今日の先生のご講演、私なりに幾つかのキーワードを感じます。最後、気付き考え行動する。これはもう学生の皆さんの、１年生の新入生の交歓会、交流会で伝えることから入るんです。それから先生がおっしゃいました伝統と文化の言葉、伝えると。多分100年以上前から赤十字の文化は秋田の地に根付き、先輩たちが第一次大戦の頃にイギリスまで派遣されて。そして最近では成田真紀さんが中村きよえさんに触発されて、体育の道から看護の道へ人生を変えていったというお話ですね。

そういう、いろいろキーワードがあったんですね。それの１つ、仕事だけじゃなく人生を楽しむというキーワードもあったかと思います。その世界でいろいろ習ってる方は違った生活の面、生き方の面も持っておられます。音楽をやる先生もいらっしゃいます。お隣の病院の遠田先生、先ほども出ました。自転車の大ファンでしてツーリング。先月も私の家へ来ました。「井上先生、一緒にあれ走りましょう」「ちょっとコロナだからやめましょうよ」って話を。そういう先生もいらっしゃいます。皆さん、仕事をしながら生き生きといてください。

どうか皆さんもそういう先達の伝統を引き継ぐ本学の学生ですので、皆さんの未来もまた、この系譜をどうやって引き継いでいくのか、とてもほんとに楽しみです。今日のご講演が一つの皆さんのこれから歩む人生の糧になれば、この講演会を主催した意味があるかなと感じます。どうか人生楽しんで、学生生活、短大生活を楽しむという視点を持って、どうかこのこれからの生活をエンジョイしていただけたらなと思います。今日は本当に、宮下先生、ありがとうございました。もう一度盛大な拍手をお願いします。それではこれにて、本日の国際人道教育フォーラム、終了させていただきます。どうもありがとうございました。